親子で読んで聴く　クラッシックギターの童話

おはなし３　　図書室ネコ　「 タンゴ・アン・スカイ」

「危ないよー勘弁してね～」
　お父さんが公園の角の横断歩道の手前で急ブレーキを踏みました。
　クロ猫が飛び出して来たのです。
　クロ猫はすまなそうに緑色の目をパチクリさせ、まるでダンスを踊ってでもいるかのように後ろ足で立ち上がり、トトットと変な足どりで向こう側の住宅街に消えて行きました。
　お父さんは、「さっきの猫おもしろい猫だね。まるでタンゴダンサーだよ」と言いました。
「めずらしいわねえ、ここらへんに、まだノラ猫がいるなんて」とお母さん。
「たぶん、この公園に用事があるんだよ」とフーちゃん。
　公園の中には小さな図書館がありました。図書館の前には芝生がありました。
　猫たちにはきっとすてきな休憩場所にもなるのでしょう。
　フーちゃんはお母さんに聞いた話を思い出しました。

　図書室猫のこんなお話です。

　お母さんが小さいころ、おじいちゃんのいなかに住んでいた時のこと。
　山の下に小さな分校と呼ばれる使われていない小学校がありました。
　むかし教室だった部屋が３部屋と、その奥に音楽室、調理室にトイレ、宿直室やお風呂もあって、その教室だった部屋のひとつが図書室になっていました。
　子供たちは少し離れた小学校に通い、小学校が終わると分校に寄ってグランドをかけまわったり、ドッジボールをしたり、サビた鉄棒にぶら下がったりして遊んでいました。
　図書室の前は芝生になっていて、猫たちも遊んでいました。
　図書室は夏休みと冬休みに東京の大学に通うお姉さんが来てその時だけ本の貸し出しができました。

　冬休みでした。
　その日、いつもじゃれ回っている猫たちの姿はなく、みんなからクロロと呼ばれているアニメのケロロ軍曹によく似た模様のオスの黒猫一匹だけでした。
　芝生に面した図書室の入り口の引き戸が少し開いていました。
　クロロが周りの様子をうかがいながらニュルリと、そのすきまから中へ入っていきました。
　しばらくすると、30 分ぐらいでしょうか、クロロが出てきました。後ろ足で立ち上がり、背筋をピンと伸ばし引き戸のすきまをニュルリと周りの様子をうかがうように。緑の目をクリッと見開き、口をキュッとむすび、まるで優等生のようでした。
　友だちが
「クロロ勉強してきたのかなあ？」
「お姉さんに勉強、教わったんだよ」
「いいなぁ、クロロのやつ、ぼくも教わりたいよ」
「おまえはムリだよ」
「なんでえ～」

猫たちが集まっている時はクロロは図書室に入りませんが、一匹だけの時はいつも図書室の中に入ります。
ある日、そっと部屋の中をのぞいてみると、ケロロは日当たりの良い窓の下で長くなっています。お姉さんは本を見ながら何かノートに書き写していました。まるで時間が止まって、温かいスープの中にいるようでした。
図書室の奥からはなぜか軽快なピアノの音が聞こえてきました。

冬休みも終わりに近づくころ、お姉さんは東京に帰っていきました。
帰りぎわ、お姉さんはクロロを抱きあげ頭をなでています。小学生のお母さんも寂しくて仕方がありません。
お姉さんはみんなに夏休みにまた来るね、と約束してくれました。
クロロはお姉さんの腕の中でゴロゴロ言っています。
その時、だれも気づかなかったようですが、隣にいた小学生のお母さんはちゃんと聞いたのです。
クロロが小さな声で「クーちゃん」とお姉さんの名前を呼んだのを。

それから何年かして、お姉さんが来なくなった年からクロロもいなくなりました。それからまた数年後のある冬の午後、お母さんたちはお姉さんが来ることを聞きつけ分校に集まりました。お姉さんは来年結婚すると言ってノッポで色黒の男の人を紹介してくれました。
お母さんは思わず「クロロ」とつぶやいてしまったそうです。

おばあちゃんが「この公園の図書館にかわいい彼女でもいるのかしら？」と言いました。
フーちゃんは、にこにこしながら何もこたえませんでした。
そしてお父さんの耳元で
「あのクロ猫は、きっとお勉強に行っているんだと思うよ。だってあの猫は緑色の目をしていたでしょう、緑色の目の猫はみんなお勉強が好きなの」
するとお父さんは「じゃあ、音楽の勉強をしているのかもしれないね？ ギターを習っているんだったらタンゴ・アン・スカイだね」と言いました。

フーちゃんは、あのクロ猫にも素敵な出会いがあるんじゃないかと想像するのでした。

タンゴ・アン・スカイ
ローランディアンス(1955ー2016)
フランスのギタリスト、作曲家、編曲家
タンゴ・アン・スカイはフランス語でなめし皮の意味
日本語に訳すとまがい物のタンゴ。
「タンゴ・アン・スカイ」まがい物でなく本物の名曲。

YouTube 動画（演奏：ギタリスト/猪居亜美さん）